

陸軍省

秘

參謀本部宛  
六月廿四日

各軍管區異状ナシ  
六月廿四日十時十分下  
甑島(鹿兒島縣)南示ハ。料ニ敵  
潜水艦アリ

照抄一九八七  
參本八月廿日受付  
防衛總司令部

(終)

昭和一九八、一四

八一四一三〇〇發  
八一四一五〇〇著  
八一四一六〇〇受付  
八一四一七〇〇提出

至急電報

球 艦 隊 參 謀 長

球艦電第一一五一號

球艦電第九七〇號ハ電註。運輸通信長官宛七月二十九日配布ニ開  
スル中兵ノ詮議進捗ノ度開示セラレ度。現地海軍側ハ全面的ニ同意  
シ非常ニ乘氣ニテ要求ノ約半數ハ現地ニ於テ具現スル如ク努力シア

(ハ終)

日誌用

極秘

至急電報

八二五二一三〇號  
一二六〇〇〇番  
ハ一カ DEB 受付  
05210 提出

昭和一九、八、一六

球部隊 参謀 長

通電先 次長、兵行本

球兵電第一五一號

一十日上陸セル獨立遠射砲第十八、第二十二中隊ノ携行彈薬ハ各  
門一四〇發ニシテ大東島情勢硬化ニ當リ彈薬僅少ナル爲先着ノ  
獨立遠射砲部隊ノ携行彈薬ヲ引上ケ充當シ各門五百發宛携行セ  
シムル如キ狀況ニテリ  
作戰ニ支障大ナリ  
而シテ當軍遠射砲彈薬全保有量ハ〇・四會戰分ノ數量ナルヲ以

テ不足數至急追送セラレ度

二十日上陸セル獨立自動車第二百十五中隊ノ擧行車輛ハ第一種分  
解自動車又第二百五十九中隊ハ第二種分  
地ノ組立能力ハ僅少ニシテ早急ノ輸送ニ多大ノ影響ヲ及ボシテ  
リ、今後當地向ケ自動車ハ少クモ第三種自動車トセラレ度

(終)

至急電報

八一五三一三〇發 八一六〇四三〇受付  
八一六〇四三〇著 八一六〇七一〇提出

球部隊參謀長

通電先 次長、兵站總監部參謀長、次官

球兵電第一五二號

十日上陸セル部隊ノ全擧行彈藥ハ左記ノ如ク僅少ニシテ戰團ニ  
支障アリ至急一會戰分ニ對スル不足數追送相成度

左記

機關砲第百三、第百四、第百五大隊 ○、三一會戰分

高射砲第七十九、第八十、第八十一大隊 ○、二五會戰分

機關銃第十四大隊 ○、二八會戰分

中迫擊第五大隊 一門ニ付三二發

尙之ガ補給見透シ承リ度

(終)

軍事秘密

電

報

次長宛

球部隊

參謀

長

球參電第二六一號

大陸命第一一〇〇號受領又

八二五二一五發  
一六四四著八天  
六四四提出

昭和一九八二六

(終)

至急秘親展

人海  
至急  
秘親展  
昭和一九一〇一一

自誌用

至急電報

一〇一〇一三三〇發

昭和一九一〇一一

通電先 次長、臺灣軍、西部軍

球 部 隊 參 謀 長

球參電第九九號

一 那覇市八十日午後敵第四、第五兩次ノ銃撃及爆撃ニ伴フ大規模ノ燒夷彈攻撃ニ依リ、全市火ヲ發シ十日夜半迄ニ縣廳其ノ他一部ヲ殘シ烏有ニ歸セリ

二 今回ノ如ク敵ガ多數ノ飛行機ヲ以テ低空ヨリ亂舞銃撃ヲ加ヘツツ相當長期ニ亙リ集中的ニ燒夷彈攻撃ヲ實施スル時ハ警防團隣組等ノ活動ハ殆下無力化サルニ至ルヲ以テ都市防空ノ劃期的改善ヲ要スルモノト思料セラレ

(終)

警急電報

警急電報

一〇、二〇〇〇、警一〇、二〇〇四、五、探長

參考次長西都軍防總 球部隊參謀長

通電先臺灣軍

球參電第一〇四號

十日空襲詳報

一敵未襲時間及機數

- 第一次 七時—八時二十分 延二 三六機
  - 第二次 九時二十分—十時十五分 延二 一〇機
  - 第三次 十一時四十分—十二時三十分 延一 五六機
  - 第四次 十一時四十分—十二時四十分 延一 九二機
  - 第五次 十二時四十分—十二時五十分 延一 三六機
- 計八三〇機  
敵主十山攻擊目標

第一次 飛行場特ニ掩體內ニ在ル飛行機  
 第二次 飛行場及船舶  
 第三次 港灣設備  
 第四次 那霸市街  
 第五次 那霸市街  
 三敵機種及攻撃法  
 敵機ハカノ十匹及ケラマンニシテ若干隻發了  
 リ其ノ攻撃法ハ數波ニ分レ急降下銃爆撃ヲ及  
 後ス銃撃高度一五〇〇爆撃(一〇〇呎及五〇  
 呎爆弾並ニ燒夷彈)高度五〇〇  
 四軍ノ戦闘狀況  
 軍ハ敵ノ未襲ヲ豫想シ八日十時ヨリ丙號戰備

(警戒警報ニ相當)ヲ下令シ對空機警ニ任ス  
 ル部隊ハ警急姿勢ヲ採ルト共ニ有力ナル一部  
 ヲ渡久地ニ配置シ該方面船圍護衛ノ處置ヲ講  
 シ兵器軍需品ヲ洞窟内ニ收容或ハ分散セシメ  
 兵員ハ迅速ニ掩蔽下ニ退避シ得ル如ク準備シ  
 ツテ待機中ナリシヲ以テ敵機來襲ト共ニ直ニ  
 ニ高射砲隊ノ射撃ヲ開始シ第八飛行師團防空  
 戰鬥中隊ハ第二次空襲時頃ヨリ邀撃戰鬥ス  
 斯クノ如クシテ終日對空戰鬥ヲ行ヒ敵企圖ノ  
 破推ニ努ム  
 五戰果  
 擊墜ニ八機(内不確實四)  
 六我が損害

(ウラ)

(1) 飛行機（全部機體内ニ在リ）又發高算練習機一炎上同一被彈（軍飛行班）軍偵察機四直協三被彈三式戰鬥機一炎上同一三被彈襲撃機一被彈

(2) 航空資材燃料

九一式揮發油	六七〇本
九五揮發油	一八〇本
含水アルコール	一一一本
蓖麻子油	二三本
爆彈	一三〇発
機銃砲彈	六七箱

落下タンクの六〇（註大新八宮古石垣ニ集積

爲搭載シアリタルモノナリ

(3) 航空地上施設大半被彈炎上袒シ滑走路ノ修置ハ全了セリ

(4) 船舶輸送船一二機帆船漁船多數

(5) 地上部隊ハ若干兵舎、炎上ト死傷

尚損害極メテ輕微ナリ

(6) 那霸市殆ト全燒ス細部ハ既報ノ通

七、其、他、大、島、宮、古、石、垣、大、東、島、方、面、大、空、襲、ナリ

損害極メテ輕微ナリ

(終)



に驚き、「生還は不可能だ」と興奮し或は失望し或る者は不参加を申出したのであつたが「日本人は戦には非常に強いが道徳の高い人々の結束した國で昔から捕虜を優遇する國である」と聞かされた彼等は大いに氣をよくして假令不時着の場合でも又は落下傘によつて跳下の際にも手さへ挙げれば生命は助かるものと樂觀して更に空襲の準備訓練を受けたのであつた。

特に日本々土進入・退去の経路・迎撃機に對する逃避法・目標選定爆撃法等の圖上の研究は格別熱心に行つたのである。

又元日本駐在武官輔佐官で昭和十六年八月に歸國した「ジュリカ」中尉が同艦に乘込んで居たので、同中尉からは

日本國內の事情就中都會の状況を主とする地誌資料國民性などに就き、綿密なる教育をうけた。

又四月十日には「捕虜になりたる場合の心得」と題する小冊子を回覧された。

日誌別

至急電報

1015 1150 1014 1530 提出

球部 隊 參謀 長

通電先 次長 次官

參考 字品

球轉電 第六六號

船戰參電 第九號

今次空襲ノ經驗ニ鑑ミ港灣防空上左記事項ヲ直チニ斷行セラレ度意見ナリ

一、臨港地帯ト一坂市街トノ間ニ防火地帯ノ設定

二、臨港地帯ノ徹底的疎開特ニ倉庫

三、港頭鐵道沿線貯藏ノ觀念ヲ一擲シ現在ノ滯貨ヲ安全地帯ヘノ一掃（特ニ危険品）

四、危険品搭揚場ハ隔絶セル地點ニ設定シ災禍ヲ受クルモ他ニ波及セシメザルコト

五、港灣復舊作業要員 資材並ニ港灣勞務ノ確保

以上各項ノ實施ト共ニ港灣ノ一元的運営ノ實現

（終）